



# 幽霊な彼女と やりまくりな日々

〜清楚系巨乳JK(幽霊)と  
付き合い始めたら  
かなりHでした

- やりまくり正常位
- 水着でパイズリ
- 壁尻即ハメ申出し
- 69朝フェラ
- 露天風呂で手コキ
- 私服で青姦
- 淫乱騎乗位

基本CG:7枚



幽霊の彼女と初エッチをしたあなたは、そのまま寝ずにセックスを続けていた。  
「エッチなことって恥ずかしいだけだと思っただけだと思いました  
…あなたが私の初めてでよかった♡」  
恥ずかしがり屋の彼女でも、今だけはどんなエッチなことでも  
聞いてくれるだろう。

「もっとなりますか？」  
「純粋な瞳が妖艶さを孕んだ。  
…私はもっとなりたいです♡…またあなたのためにおちんちんで

私のおまんこを滅茶苦茶にしてください♡」  
普段の真面目な姿からは想像もできない言葉が彼女の口から飛び出た。





「んあああっ♡あああっ♡またおちんちん動きましたあっ♡」  
「まだ出して一分も経ってないのにどんだんガチガチに勃起してきてますう♡」  
腰を激しくすればするほど彼女は悦ぶ。  
「気持ちいです…っ♡もっとお…もっとおセックスしましようにっ♡」  
「一緒に気持ちよくなってくださいさいいいづら♡」

エッチの相性は最高のようだ。もとは一つだったかのように  
あなたと彼女はとけあい、とろけあう。  
そして、最高の快感を胸に抱えたまま膣奥で、また、射精をした。





「私っ……わらひっ、いっちやいますうううう♡」  
涙と汗と精液でぐしゃぐしゃになった顔が、快楽でさらに歪んだ。  
「イクうううう♡もうらめえええ♡」  
彼女は舌を突き出し、だらしなく喘いだ。

「……あうう……こんな自分……初めて知りました……うああ……どうしましよう」  
「エツチに目覚め始めた誠実で真面目な彼女がどうなるかはあなた次第。」  
「私……エツチ……ですか？」





海辺でデート中。  
あなたを選んだ水着を着て彼女は上機嫌。  
夏の勢いも借りて大胆にパイズリしてくれてた。

パイズリ  
ですわー。

「私のおっぱいは好きなんです…よね？」

「…だったらこうしてあげます♡」

慣れない手付きでパイズリを始めた。

水着がずれて勃起した乳首がはみ出た。

「わ、私は幽霊だから周りに見られないので

平気です…だから好きだけ見ても

いいですよ…♡？」

「べちゅ、れる♡…おちんちんてこんな味

するんですね…ふふ喜んでます…もつと

舐めちゃいます♡」

大胆な彼女の行動にたまらず射精感が

こみ上げる。



「あわわっ……す、すごい出てます♡  
おちんちん暴れてますよ♡」  
夏の暑さも重なって爆発したような勢いで射精し、  
彼女の白い肌や水着を汚していく。

「こんなに気持ちよくなってくれたなら……  
恥ずかしいの我慢したかいがありました♡」  
デートはまだ始まったばかり。  
「なんか、動いたらお腹空いてきましたね  
……向こうに海の家があったので  
そこでご飯にしませんか？」  
この夏は一生の思い出になりそうだ。



部屋に戻ったら彼女が壁に埋まっていた。  
「助けてくださいっ……その……  
甘酒で酔ってしまっ……  
気づいたら壁に嵌ってしまった……」

てっ

冷静になるよう促すが、彼女はもう一時間近くこの  
体勢らしく、パニック状態だ。  
「うあああ、怖いですよおっ……私一生このまま  
なんでしょうか？でも私幽霊でしたっ！  
だったら永遠に……このまま!?」  
あなたは彼女を落ち着かせるため、大胆な行動に出る……。

むっ

えっ

じっ



「んあああああっ！……えっ、何で今!?えっ？」  
問答無用でセックスを始める。  
「ちよ、ちよっ」と待ってくださいつ  
…今はそんなことしてる場合じゃつ  
…んああ♡」  
ガンガンと腰を打ち続けると、  
次第に彼女の口数も少なくなり、  
セックスに没頭し始める。

「あっ、ああっ♡んああっ♡ああっ♡」  
媚肉の打ち付け合う音と彼女の喘ぎ超えだけが聞こえる。  
「んああっ♡気持ちいいっ♡私イきそうですう♡」  
10分もしない内に膣はほぐれきって、彼女は絶頂を訴えた。  
一層腰を激しく動かした。あなたも一緒に  
絶頂を迎えることにした。





「んきゅううううう♡

中出しされてますうううう♡」

絶頂を超えた後、彼女は騒ぐこともなく

落ち着いて呼吸を整えていた。

「……はあ……はあ……あれ？」

壁にがっちり嵌っていた尻が

ふわふわと浮き、自由に通り抜けが

できるように戻っていた。

「……まさか私を落ち着かせるために？」

「……ありがとうございまして♡」

壁に嵌った尻がエロかったのが一番の理由だったが、

それはそつと胸にしまっておいた。



目覚めたら尻が顔に乗っちゃっていった。  
彼女の寝相の悪さは、日に日に  
アクロバティックさが増しているようだ。  
「……そんなにくっつかないでくださいよお……えへへ」  
寝言のようだ。幸せな夢を見ているのだろうか。  
だが彼女は目覚めたらきつと、羞恥心で顔を  
真っ赤に染め理不尽な暴力に訴えるだろう。  
「アイスですか……？」  
じゃああいただきます……むにゃむにゃ  
朝立ちしたチンコが彼女の頬に当たると  
そして、彼女はそれを何と間違えたのか  
いきなり啜え込んだ。

ト……

ト……

ムニャ











彼女と付き合って一年が経つ特別な日。  
他に誰も居ない貸し切り状態の露天風呂で献身的に背中を流してくれるようだ。  
「何でここに……こんなに固くしてるんですか？」  
「私は背中を流してあげるだけのつもりだったのにな」  
「でもおちんちんは重点的に洗わないといけませんよね……」  
私達が肉体的に繋がれる大事な部分ですから♡」

むっ

いつもよりエッチに積極的になっている。  
背中を流すという口実で、おっぱいを押し当てながら  
手コキをし、耳元でいやらしく吐息を吹きかけて来る。

二巻

エッ







「こんな所でなんて…でももうガマン  
出来ませんっ♡  
思う存分奥に来てくだささい♡」  
「んああっ♡奥にガンガン来て  
気持ちいいところたくさん擦れてますっ♡」

デート終わり、休憩のためラブホに  
向かったが、彼女は幽霊で周りには  
見えないため、一人客と間違われ  
門前払いされた。抑えきれず、  
燃え上がった気持ちは青姦を  
近くの公園の茂みで青姦を  
始めてしまう。



「デートが始まった時から子宮疼きっぱなしでおまんこずっと濡らしてました！だから今獣みたいに犯されると雌の本能満たされまくっておちんちんから精液搾り取ろうと必死に腰振っちゃいますう♡」  
完全に周囲の情報がシヤットアウトされ、セックスのことしか考えられなくなっているようだ。

「んあああっ♡気持ちいいっ♡やつぱりせつくしめ最高ですううう♡もつと…もつとおお♡」  
溜まった性欲が弾けて淫乱になる彼女。  
「出してえ♡おちんちんから濃いのがいっぱい出してくだささい♡」  
あなたが射精するための最大限の動きでおねだりして来た。



接合部から愛液と精液が溢れ、混ざり合いながら地面に落ちていった。  
「はあ…はあ…帰りましたよっか♥」  
彼女はあたなの腕に寄り添い、帰る途中も幸せそうな笑みを崩さなかった。

「んうううううううう♥全部出し切る  
までおまんこいっぱい  
締め付けちゃいますう♥」  
ちんこが脈打つ度に膣内はうねり  
子宮口が亀頭に吸い付いてくる。  
んっ…ああっ♥…ああ  
…幸せです♥」



「んあっ、ああっ♡おまんこすっごく気持ちいいです♡  
おちんちんもたくさん気持ちよくなったださい♡」  
飛び跳ねるように体を動かかし楽しそうにセックスを堪能していた。  
「ふふ…こうすると違うところ擦れてんああっ♡」  
「今いい感じに動きが合いましたね♡」  
好奇心が止まらない。  
エッチに対して従順になり、気持ちよさを探求していた。

「私、凄く恥ずかしいことしてますね…こんな…  
や、やっぱり深く考えるのは止めましようー！」  
揺れる大きな胸、エロい腰使い、甘い喘ぎ声、  
一挙手一投足があなたを誘惑する。

おまんこ♡

おまんこ♡

おまんこ♡

おまんこ♡

おまんこ♡



「んああっこれ凄いっ♡お腹持ち上げるように突き上げると…んあああっ♡」  
その日の気分や着ている衣服一つでも感じ方は変わる。  
いろんな動きでまだ感じたことのない快楽を探し貪り合う。  
「気持ちいいっ♡気持ちいいっ♡」  
「セックス好き♡…たまりませんっ♡」

不意に彼女はビクンと反応させ、  
感じまくっていることがよく伝わってきた。  
「あっあっああっ♡もうっ…わらひっ♡イ…っ♡」





「イクうううううう♡んあああああ♡♡♡」  
「気持ちよすぎてバカになりゆうううう♡」  
「はあ…はあ…もうずっとこのおちんちん離したくありません…♡」  
肩で呼吸をし興奮が冷めやらない。

「まだ…ガチガチです…空っぽになっても  
今日は朝まで寝かせませんよ♡」  
「これからも彼女はきつと求めた分だけ  
強く求め返してくれるだろう。」  
この時が許される限り。

ムトムト